

# 初級教科書で導入される「のだ」文の日本語学習者による使用実態 ～ C-JASを使用して～

How do Learners of Japanese Use “*noda*” They Learned in Elementary-level Textbooks?  
～ With data from C-JAS ～

蔦田 実央<sup>※</sup>  
Mio TSUTADA<sup>※</sup>

## 要旨：

日本語教育施設・機関等の日本語クラスでは教科書が使用されることが多いが、学習しても学習者が自発的に使用できるようになるには時間がかかるものもあり、「のだ」文はその一つである。「のだ」は日本語初級教科書では「説明を述べる」、「強調」という説明がされることが多いが、学習者はどのように「のだ」文を使用しているか調査し、考察した。

まず、「のだ」文の先行研究、初級での「のだ」文指導に関する先行研究を確認し、第4章ではC-JASを使用し学習者の「のだ」文使用について、教科書での練習内容と実際の「のだ」使用に差がないかを調査した。そして、最後に第5章で日本語教育への応用について考察している。

キーワード：「のだ」文、使用実態、初級教科書

## I. はじめに

文化庁の令和元年の調査結果によると、日本語教育機関、施設等に在籍する日本語学習者数は平成2年の60,601人の4.6倍である277,857万人いる。日本語教育機関・施設等で学習する場合、教科書を使用することが多い。日本で母語話者である教師に日本語を習っても、全ての学習者が授業で習った文法項目を実際の場面で使えたり、自然な日本語が話せるようになったりするわけではない。学習者が習ったものを使えない原因の一つとして、教え方や日本語教科書の練習方法が考えられる。本稿では、有標の文と無標の文との差異がわかりにくく、花城（1994）では習得が難しい項目の一つとされているが、自然な日本語の習得には必要（菊池2006）な文法項目である「のだ」文に注目する。まず、「のだ」文に関する先行研究、初級における「のだ」文指導の先行研究を確認したうえで、C-JAS（中国語・韓国語母語の日本語学習者縦断発話コーパス<sup>1)</sup>）を使って学習者の初級教科書で学んだ「のだ」文の使用実態を調査し、学習者の習得状況を明らかにしたい。

---

<sup>※</sup>日本経済大学経営学部商学科

## II. 「のだ」文の先行研究

野田（2012）によると、日本語教育の実際は日本語の構造や体系を教えようとしている部分が多く、伝統的な言語学的な研究の論理を日本語教育に持ち込んでいる。このことから、日本語教科書での扱いに関する先行研究をみる前に、「のだ」文がどのような意味・用法を持つとされているかみておく必要がある。後で詳しく見るが、初級教科書では、「のだ」文の平叙文と、疑問詞疑問文、「～か」の形の疑問文、それから「～が、…。」の形の前置き表現が扱われているので、これらの先行研究をまとめた。

「のだ」の先行研究で共通しているのは、「のだ」は状況や先行文脈と「のだ」文を関連付けるということである。中でも、その関連付けは起こった事態に対する〈説明〉であるとするものが多い（奥田1990、酒井1996、吉見・劉2005）。野田（1997）は「のだ」文を文脈との関連・結びつき、述語によることからの成立を示す「ムードの「のだ」」と、「の」によって文を名詞化し、述語によることからの成立以外の部分をフォーカスにする機能である「スコープの「の（だ）」」との2つに分けた。また、初級教科書の分析を行った大場（1992）は野田（1997）の「のだ」を2つに分けて考える立場をとり、モダリティ表現の中の「説明的陳述」の一つである「のだ」文を7つに区分している。

次に、初級教科書で扱われるムードの「のだ」の疑問文に関してだが、野田（1997）は疑問詞を伴う場合もそうでない場合も「自分は認識していないが聞き手は認識している既定の事態を認識したい、認識しようという話し手の心的態度を表わす」（p124）と述べている。疑問文というのは、話し手が知らない事柄について聞き手に聞くものなので、その部分は共通しているが、「自分が認識していないことを認識したい」という話し手の心的態度が「のだ」が使用されている①の文より「のだ」がない②よりも示されている、と述べている。（例文①②は野田（1997:p124）から引用）

- ①（日常会話で）「あの一、この漢字は何と読むんですか？」
- ②（クイズで）「では、この漢字は何と読みますか？」

これに関しては田野村（1990）も「のだ」の疑問文が用いられない場合として、一般に、その答えがすでに定まっている状況でなければ用いることができない、と述べている。これは、まだ定まっていない事柄についてや考慮の上で返答するよう相手に求めるという状況では「のだ」の疑問文は用いられないということである。

- ③ 暑いからエアコンをつけても {いいですか/\*いいんですか}。

上の③は先行する文脈や状況に関連することがない場合、用いられない。エアコンをつけてもいいか聞かれてから答えを考えるので、聞かれる以前に答えが決まっているわけではないからである。

最後に、道を尋ねたり依頼したりする場合の前置き表現としての「～のですが」だが、これに関して野田（1997）は慣用的な表現など例外もあるが、「話し手が、聞き手も従属節の事態を知っている

とみなせば「が」を、知らないとみなせば「のだが」を用いる。」(p171)としている。(例文④は野田(1997:p172)から引用)

- ④ \*きみとはゆっくり話す機会もなかったんですが、直美に、いい思い出をもたせてやっていただきました。
- ⑤ 先生、ちょっとご相談したいことがあるんですが、お時間ありますか。

④の例は、話し手、聞き手ともに「話す機会がなかった」ことを知っている。このことから、「が」が自然である。⑤の例は、「先生に相談があること」を聞き手が知らないとし話し手がみなしている場合であるので、「のだが」が自然である。

「のだ」の平叙文と疑問文は、先行する文脈や状況に関連のあることを述べる時に使うという点で共通している。関連付けて聞き手が知らないこととみなすことを《説明》として述べたり、話し手が知っていることとらに関する追加の情報が欲しい時に「～んですか」の形で質問するという点と、前置き表現の「～のだが」も聞き手が従属節の内容を知らないときに使うという点は共通しているが、前置き表現の「～のだが」は先行する文脈や状況に関連していないことを述べる場合にも使われるという点で異なっている。

### Ⅲ. 初級教科書における「のだ」文の扱われ方に関する先行研究

「のだ」文の指導に関する先行研究には古川(2005)、庵(2000)、鹿浦、小村(2015)などがある。

古川(2005)は初級教科書の説明では「のだ」文の基本的機能が何であるかわかりにくく、提示される形式も様々であるにも関わらず説明がないので学習者にとって習得しやすい方法ではないとしている。古川(2005)は初級教科書の「のだ」文を3つのタイプに分け、教え方を提案している。(⑥～⑨の例文は古川(2005:p71-72)による)

タイプⅠ：発話場面の復元が容易なもの

- ⑥ 渡辺さんは時々大阪弁を使いますね。大阪に住んでいたんですか。  
 …ええ、15歳まで大阪に住んでいました。  
 教え方→前提を明示し、文の順序を変化させ確認する。

タイプⅡ：先行文脈で示される前提が暗黙の了解としてすでに提示されているもの

- ⑦ A：どうして遅れたんですか。  
 …バスが来なかったんです。
- ⑧ 生け花を習いたいんですが、いい先生を紹介していただけますか。  
 教え方→文型として提示し、文の順序を変化させ確認する。

タイプⅢ：前提との関連付けが困難なもの

⑨ あしたひまですか。

…いいえ、日本語の試験なんです。

教え方→談話に組み込んで提示し、談話場面を具体的に説明する。

これら3つのタイプは、話者と聞き手が前提を共有しているかどうかの違いがある。タイプⅠとⅡは話者と聞き手が前提を共有しているものである。古川（2005）はタイプⅠは視覚化して前提を学習者に提示し理解を促進できると述べている。タイプⅡについて⑦の場合、前提は暗黙の了解であるので文脈を理解させる必要があるが比較的しやすくと述べている。しかし⑧の前提は「発話の場の状況、すなわち話し手聞き手の関係」（p73）であり、「学習者に前提との関連付けを意識させるのは容易ではない」（p73）と述べている。つまりタイプⅡの中でも理解のしやすさの差があると考えられる。タイプⅢは共有する前提がないものである。タイプⅡの⑧のような例も前提がわかりにくい、文型として提示できるという点でタイプⅢより負担にはならないとしている。古川（2005）はタイプⅢは「初級で必ずしも指導する必要はなく、中級以降の課題として残すのも一つの選択肢の一つになる」（p75）と述べている。また鹿浦・小村（2015）も「のだ」文の用法を網羅的に教えるのではなく、まずは前提条件が具体的に提示できる《理由》に絞って進めるべきだと述べており、段階的な指導が必要であることがわかる。

「のだ」文の使用には文脈が必要であり、前提条件をわかりやすく提示することが必要だということがわかった。しかし、一つ一つの練習にその前提条件を示すと一つの練習に使うスペースが広くなり、練習数が少なくなってしまう可能性も考えられる。練習数を減らすより、文型の説明書や教師の指導などで教科書では明示できない部分を補うことが必要だと考えられる。これらのことから、自然な会話に必要な「のだ」文習得には文型定着を目的とするだけでなく、場面や文脈の流れなどがわかりやすい指導が必要だと考えられる。

## IV. コーパスを使った日本語学習者の使用調査

### IV.1 使用コーパスと検索方法

C-JASを分析対象とした。C-JASは迫田・佐々木・小西・李（2014）によると、母語が中国語の学習者3名、母語が韓国語の学習者3名の計6名を1991年6月～1994年3月の3年間8回にわたり調査した縦断的調査のコーパスである。この6名は最初の1年間は同じ日本語学校で同じ教科書を使って日本語を学習した。日本語学校卒業後の進路は大学や専門学校など様々で、日常生活での環境が学習者の日本語にも影響を与えていると考えられる。調査者は母語話者であり、インタビューのテーマは8回とも決められており全員同じテーマでインタビューを受けるが、テーマとは違う話題も多く話されており、学習者の自然な会話のコーパスだと言える。

今回は中国語を母語とする3名（C1、C2、C3）の学習者の調査を行った。それぞれの発話数は〈表1〉のとおりである。

&lt;表1&gt; 学習者の発話（会話でのターン）数

学習者	1期	2期	3期	4期	5期	6期	7期	8期
C1	497	435	446	546	366	412	465	368
C2	495	435	433	319	334	517	552	275
C3	620	640	595	579	458	486	327	364

(筆者作成)

検索方法としては「のだ」文の機能を持つ形を文字列で検索した。疑問詞の調査は疑問文に対する返事も調査するために、学習者・調査者両方の発話を調べたが、それ以外は学習者の発話のみを検索した。⑩のような「～んよ」などは「のだ」の方言の可能性もあるが今回の検索結果にはいれていない。

⑩ L: ああ、私毎日、初め頃も風邪Φ思ったんよ

また、「のだ」ではなく活用など他の文法の間違いによる誤用も今回は「のだ」を使う場所が文脈の中で自然かどうかで判断したので、不自然に感じたものの数にはいれていない。

#### IV.2 文末・肯定の「のだ」文<sup>2)</sup>の検索結果

文末・肯定の「～んです」は教科書で最も多く練習をするので、それを学習者が実際に使用しているかどうかを調べるために検索した。

&lt;表2&gt; 学習者の文末・肯定の「のだ」文使用の検索結果と誤用数

学習者	1期	2期	3期	4期	5期	6期	7期	8期
C1	0	0	3	2	26(5)	34(10)	36(14)	50(15)
C2	3(1) <sup>3)</sup>	8	17(1)	19(2)	17(2)	59(3)	45(9)	152(32)
C3	0	0	1	4	1	7(1)	1	5(3)

(筆者作成)

C1は1～8期通して151回「のだ」を使用しているが内18回以外は全て「そうなんです」という発話であった。C1は「そうなんです」を一つのかたまりとして覚えて使用していると考えられる。18回のうち3回は誤用であった。C2は会話の中で「のだ」文の使用回数が増えている。また、古川(2005)のタイプⅢの「前提との関連付けが困難なもの」の使用も見られた。そして、調査者との会話なので「です・ます」の形での発話が多く、普通形の「のだ・んだ」は文末で使われることは少なく、その場にはいない第三者の発話を引用した時などの使用が多かった。

次に、学習者の誤用がどのようなものかを調査するために、C1、C2、C3の3名の誤用の分類を行った。本調査での学習者の「のだ」文の誤用の判断基準は、市川(2010)の分類に従った。その中でも活用などの間違いではなく、文脈の中での使用の誤用に関するものを使用した。使用した分類は以下の通りである。(例文⑩は市川(2010:p586)の『日本語誤用辞典』より引用)

i 付加

・不必要なところで「のだ」文を使用している。

⑩ \*今の福建省は、台湾と中国の経済交流のチャンネルとして存在するんです。

→今の福建省は、台湾と中国の経済交流のチャンネルとして存在する。

ii 混同

・「からだ」、「ものだ」、「わけだ」、「～と思う」、「～だろう」とすべき場所で「のだ」を使用しているもの。

<表3> C1、C2、C3の誤用の分類

	1期	2期	3期	4期	5期	6期	7期	8期
誤用数	1	0	1	2	7	14	23	50
付加	1			1	7	12	18	37
混同			1	1		2	5	13

(筆者作成)

分析結果から、日本滞在期間がながくなるにつれて⑫のような「付加」による誤用が増えていることがわかる。また、「混同」の誤用は⑬のように「ので・から」を使うべきところで「～んですから」を使用しているものが、C2に多く見られた。これは理由を述べる表現として理解してしまっていることが原因と考えられる。

⑫ L：はい、〈あー〉だからあたし北京旅行に行ってー、え、11月ー頃、〈うん〉結構寒かった、その一時、入れたんよ、〈うん〉もう家にも、しゃ、あ、シャツ1枚だけになった、〈あーそう〉よく上海より良かったんです、住みやすい (下線は筆者による)

⑬ N：そうだよねー 〈はい〉ほとんどしなかったもんねえ  
L：はい、〈へえー〉そのときも若かったし、あまりべんぎょん [勉強] とか、あの、遊びの方が、夢中だったんですから (下線は筆者による)

ここまで文末に現れる肯定の「のだ」文の調査結果をみてきた。C2の8期では120回使用していること、C1は18回以外全て「そうなんです」を使用していることから、C1、C3は文末に「～んです」をあまり使用していないことがわかる。また、母語話者の使用数と比較しなければならないが、C2の1～7期の使用数も多くなかった。このことから、長い会話の流れの中で、いつ文末・肯定の「のだ」を使っていいのか理解できていない可能性も考えられる。また、誤用分析では、「付加」の誤用数のほうが「混同」よりも多い。「付加」による誤用は市川(2010)も述べているとおり、感情過多の発話になったり、押し付け感が強くなったりしてしまうことがある。これは、迫田(2001)が述べている「自分の気持ちや目的を「強調しよう」としたり、「丁寧に言おう」としたりする機能を持たせるため」(p37)に「のだ」文を使用していると考えられる。使用数が少ないことと合わせて考えると、やは

り「のだ」文を使用する文脈・状況を理解できていないことがわかる。他にも終助詞「よ」や「ね」との共起による誤用もあった。教科書では終助詞が、他の文型に与える影響についてはあまり述べられていないので起こる誤用であると考えられる。

### IV.3 「～んですが・のですが」の調査結果

古川 (2005) のタイプⅡに会話の切り出しや以来の前置きとして会話で使われる「～のですが、…」がある。これは古川 (2005) でも述べられているが、「のだ」文の導入後、会話文や練習問題の中で頻繁に使われている。そこで学習者の使用について調査した。

<表4> 学習者の「んですが・のですが」の使用数

学習者	1期	2期	3期	4期	5期	6期	7期	8期
C1	0	0	0	0	0	0	0	0
C2	0	0	0	0	0	1	1	1
C3	0	0	0	0	0	0	0	0

(筆者作成)

教科書内の「～んですが」は依頼するときの最初の部分で使用されていることも多い。このコーパス内では依頼する場面がなく学習者の使用数が少ないのも納得できる。しかし、状況を説明するときにも使えることを考えると、使用数は少なかった。「～んですが」は母語話者も発話を言いさして後続する内容を聞き手に推測させるのに使用し、自然な日本語には必要である。教科書でも依頼や助言を求める際の前置きとしての「～んですが」に限らず、様々な文脈での提示をするべきである。

### IV.4 「どうして+のだ・んだ」の疑問文の調査結果

教科書の練習には古川 (2005) のタイプⅡの「どうして東京に行くんですか」など「どうして」を使って理由や追加の情報を得るものがある。教科書では⑦のような疑問文には「のだ」文で答える練習をしているが、実際学習者が「どうして+のだ」の疑問文に「のだ」文で答えているかを調べたのが<表5>である。そしてこの他に母語話者が「どうして+のだ」を使わない疑問文の返答に学習者が「のだ」を使って答えた回数を調べたものが<表6>である。

<表5> 学習者の「どうして+のだ」の使用数

学習者	1期	2期	3期	4期	5期	6期	7期	8期
C1(N) <sup>4)</sup>	9	0	4	1	0	3	0	3
C1	0	0	0	0	0	0	0	0
C2(N)	2	2	3(N) <sup>5)</sup>	1	0	2	3	4
C2	0	0	0	0	0	0	0	0
C3(N)	3	6	2	4	5	1	1	5
C3	0	0	0	0	0	0	0	0

(筆者作成)

<表6>学習者が疑問文の返答に「のだ」文を使用した回数

学習者	1期	2期	3期	4期	5期	6期	7期	8期
C1	0	0	0	0	0	0	0	1
C2	1	2	1	1	1	0	0	5
C3	0	0	0	0	0	0	0	0

(筆者作成)

⑭ N：どうして荷物がそんなにたくさんあるの？

L：昨日ね、あの一、【人名A】ちゃんの、【人名A】ちゃんは大学の友達のうち [家] に泊まりΦ行ったんです <うん>、あの一、【人名A】ちゃんのお母さんは桃が、くれたんです

⑮ N：どうして東京行かなかったの？

L：え一、ちょっと遅かった、の一、学校締め切り、全部、もう、うん

(⑭,⑮,⑯の下線は筆者による)

教科書では「どうして+んですか」の疑問文に「～んです」で答える練習がある。古川（2005）でもパターン化がして導入、練習することができ、学習者にとって困難とはいえないと述べている。しかし、検索結果を見ると⑮のように学習者が「どうして～んですか」の疑問文に「～んです」で答えられていない数は多かった。しかし、「どうして+んですか」の疑問文ではないが、⑯のように「どうして」が含まれたものに「～んです」で答えているものが多かった。

⑯ N：どうしてですか？

L：あの一、やはりもう、なん、なん5月1回先生と一相談を、<うん> のって、<うん>

その時から、自分の考え方とか、あと一、うん、べんぎょう [勉強] の仕方とか、もう、少しずつべんぎょう [勉強] して行って、あのかん、変わったんですよ、だか [だから] その時から一、あー日本文学ってこんなに面白いΦかーとか、うーん思い始めたん

「疑問詞+のだ」に関する調査の結果数はあまり多くなかった。調査者も相手が学習者なので「のだ」を避けて「です・ます」で質問している可能性もあるので、母語話者同士の会話では違う結果が出る可能性がある。教科書には「のだ」を使った疑問文には「のだ」を使って答える形の練習があるが、学習者はそれを実際の会話ではあまり使っていないことがわかった。しかし、数は少ないが疑問文に対して理由を「のだ」を使って説明しているものも見られたので、詳細を説明するという「のだ」の機能を理解している学習者がいることもわかった。

## V 日本語教育への応用の提案

「のだ」文の先行研究から、「のだ」文には様々な機能・用法があり、母語話者は会話の中でこれらの機能・用法を使い分けていることがわかった。初級日本語教科書で導入するのは前提がわかりやす



いものもあるが、実際には学習者は教科書で学んだ「のだ」文をあまり使用していなかった。このことから、活用形などの練習ばかりではなく、「のだ」文を使用する場面と一緒に指導する必要がある。導入、文型としての練習後は状況がわかりやすいロールプレイなど学習者が自分で考えて会話を作る練習を行い、どこで「のだ」文を使えば自然な日本語になるのかを指導するのも一つの方法である。また、「のだ」文を扱った後の授業でも、「のだ」文が使われている部分では文脈や「のだ」の有無によっての違いを確認することで、教科書で練習した使われ方に気づくことができる。

「のだ」文は、初級で扱われる機能以外もあり、また、否定形になると、野田（1997）のいう「スコープ」としての機能を持つ場合が多く、初級で学習する否定形とは違う意味になる。このことから、「のだ」文のような使用される場面や文脈で機能が変わる文型は、初級で指導したから終わりとするのではなく、段階を経て指導していく必要がある。

## VI おわりに

本稿では「のだ」文の先行研究と合わせ、日本語教科書での「のだ」文の扱いに関する先行研究を確認した。そして、学習者の使用実態を調べ、学習者が「のだ」文を使用できているかを分析した。コーパスの調査によって学習者の「のだ」文の使用数が少ないことと、教科書での導入がない機能は学習者は使用できていないことがわかった。

今後の課題としては、学習者の使用に多く見られた「～んですよ」、「～んですね」のように終助詞をつけることで学習者の発話態度が変わっているか、また、「のだ」文の機能を段階的に教えるなら、どの段階でどの機能を教えればいいのかなど、研究を進めていきたい。

---

1) 以下、C-JAS

2) 「～んです」、「～のです」、「～んだ」、「～のだ」を示す

3) ( ) 内は誤用数。表の中の数には誤用も含む。

4) 母語話者 (N) が使った「どうして+のだ」を使った回数

5) ( ) 内は学習者が「のだ」文を使って答えた回数

<参考URL>

国立国語研究所C-JAS<<http://c-jas.jpn.org/main.py>> (2021/8/11)

「平成24年度国内の日本語教育の概要」文化庁<[https://www.bunka.go.jp/tokei\\_hakusho\\_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku\\_jittai/r01/](https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku_jittai/r01/)> (2021/8/11)

<文献一覧>

- 庵功雄 (2000). 「教育文法に関する覚え書き：「スコープの「のだ」を例として」,一橋大学留学生センター紀要,3,33-41,頁.
- 市川保子編著 (2010). 『日本語誤用辞典 外国人学習者の誤用から学ぶ日本語の意味用法と指導のポイント』,スリーエーネットワーク
- 大場理恵子 (1992). 「『のだ』文の用法と教科書分析及び習得過程について (第四回日本言語文化学会発表要旨)」,言語文化と日本語教育,第4巻,50-55,頁.
- 奥田靖雄 (1990). 「説明 (その1) —のだ、のである、のです—」,ことばの科学,4,173-216頁.
- 菊地康人 (2006). 「受難の『んです』を救えるか」,月刊言語,第35巻,6-7,頁.
- 酒井悠美 (1996). 「会話文における『~のだ』」,横浜国立大学留学生センター紀要,3,16-36頁.
- 迫田久美子・佐々木 (木下) 藍子・小西円・李在鎬 (2014). C-JAS (Corpus of Japanese as a second language) 構築に関する報告書,大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立国語研究所 日本語教育研究・情報センター
- 鹿浦佳子・小村親英. 「効果的な『んです』教授法の一試案」,関西外国語大学留学生別科日本語教育論集,25,69-90,頁.
- 花城可武 (1994). 「『のだ』文の習得—縦断的調査と横断的調査の結果を通して—」,南山日本語教育,7,32-47頁.
- 古川由里理子 (2005). 「初級における『のだ』文指導の一試案」,大阪外国語大学留学生日本語教育センター授業研究,3,67-78,頁.
- 田野村忠治 (1990). 『現代日本語の文法 I』,和泉選書.
- 野田尚史 (2012). 「日本語教育に必要なコミュニケーション研究」,日本語教育のためのコミュニケーション研究,くろしお出版.
- 野田尚史・迫田久美子・渋谷勝巳・小林典子 (2001). 『日本語学習者の文法習得』,大修館書店
- 野田春美 (1997). 「『の (だ)』の機能」,くろしお出版.
- 吉見孝夫・劉笑明 (2005). 「『のだ』の意味・用法」,北海道教育大学紀要 人文科学・社会科学編,第55巻第2号,17-25頁.